

主 題：よみがえりと終わりの日

聖書箇所：コリント人への手紙第一 15章20-29節

主イエス・キリストの復活の目撃者であったパウロから「すべての人間は必ずよみがえる」と、そのことを教えられていたコリント教会の人たち、でも、それでいて復活を信じない人たちが教会の中に存在したとパウロは記していました。そこでパウロは改めて「よみがえりの確実性」を教えるのです。また、それだけでなく、よみがえりについての詳細を、順序や実際によみがえりが起こった後に何が起こるのか、そのことをパウロは教えようとします。それらのことを通して、そのすべてを支配しておられる神がいかに偉大なお方なのか、そのことを改めて私たちに教えてくれます。

A. 初穂であるキリストのよみがえり 20節

まず、20節をご覧ください。「しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。」、もうすでに見たように、パウロはこの「よみがえられました」という動詞を敢えて完了形にしています。なぜなら、それはもうすでに完了した出来事だからです。実際にキリストの復活を目撃したパウロは、その事実を今一度コリント教会の人たちに教えたのです。確かに、イエスはその死からよみがえって来られたと言います。この「初穂」ということばは前回も見ましたが、これは「その年に最初に収穫した穀物、果物」のことです。ということは、何を意味するのか？その後にはたくさんの収穫が続くということです。

パウロはここで「眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。」と言いました。キリストは死を経験した人たちの初穂として死から敢然と復活された、「使者の中から最初によみがえられた方」と記しています。イエスが初穂だということは、その後にも同じようにその死からよみがえる者たちが大勢いるということです。多くの復活がこの後に必ず続くということを保証するのです。そして、この復活に与る者たちは、神によって贖われたあなたであり私であると、みことばはそのように教えてくれるのです。

死んだ後によみがえりを経験するのは私たちクリスチャンだけではありません。すべての人々が経験します。例外なくよみがえるのです。ヨハネ5：28、29に「:28 このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。:29 善を行った者は、よみがえっていのちを受け、悪を行った者は、よみがえってさばきを受けるのです。」と書かれています。気付かれたように、どちらの人間もよみがえるのです。問題は、よみがえった後、どこで自分の永遠を過ごすのか？ということです。神とともに祝福の中で過ごすのか、それとも、のろいの中、地獄の中で永遠を過ごすのか、そのどちらかだということです。

B. アダムとキリスト 21-22節

21節を見ると初めに「というのは、」ということばがあります。20節でパウロはキリストはもうすでに亡くなった人々、眠った人々の初穂としてその中から最初によみがえって来られたと言いました。21節からはその説明をしていこうとするのです。ですから、「というのは、」という接続詞を初めに記すのです。この後パウロは何を教えていくのか？21節と22節を見ると「アダム」と「キリスト」を対比しています。21節「というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。」、この21節を直訳すると「ひとりの男による死が、そして、ひとりの男により死者のよみがえりが」となります。このようにふたりの男を比較するのです。ひとりには死をもたらした、もうひとりには死者からのよみがえりをもたらしたと。アダムと主イエスの比較です。二つの結果がそこには記されています。

1. アダム：ひとりの男により死が来た

アダムによって全人類に死がもたらされました。ご存じのように、エデンの園においてそれが起こったのです。神が言われたことは創世記2：17「しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」でした。これが神の命令でした。神の約束でした。神に逆らうその罪は必ずその結果をもたらすのです。神の命令に逆らうならあなたは必ず死ぬことになると。それが実際に起こったのです。このことをパウロはローマ書5：12でこのように教えています。「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がったのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです。」、ここにアダムが全人類にもたらした二つのものが記されています。一つは「罪」であり、もう一つは「死」です。

⇒ アダムが全人類にもたらしたもの

1) 罪 : 「罪が世界に入り、」と書かれています。敢えてここで「罪」を単数にしているのは、いろいろ罪を列挙するのではなく、これは「罪の性質をもつ者となった」ということです。悲しいことに、私たちは私たちのうちに罪を生み出していく汚れた性質があることを知っています。そこから様々な罪が生まれて来るのです。パウロが言うことは、アダムの罪によってこの罪が全人類に及んだ、ゆえに、私たちは生まれながらにその性質をもって生まれて来たということなのです。

2) 死 : 12節には「罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がった」とあります。つまり、罪を犯すことによって神が約束されたようにすべての人は死ぬ者になったのです。ですから、「死の普遍性」です。例外なくすべての人は死ぬのです。「死」というとまず思うのは「肉体的死」です。肉体という物質の部分とたましいという霊的な部分が分離するのです。肉体は墓に入ります。そして、霊的な部分は定まったところにいくのです。神のところかそれともハデスカ、です。

二つ目の「死」は「霊的な死」です。悲しいことに、いのちの源である神との分離です。それまでの私たちは神と親しい交わりをもっていたにも関わらず罪によっていのちの源である神と分離してしまいました。ゆえに、私たちは永遠のいのちを失ってしまっているのです。救いが必要な者となったのです。最後に出て来る「死」は「永遠の死」です。

ですから、パウロがここで教えていることは、アダムを祖先とする私たち人間はみな必ず死ぬということなのです。そのことを1コリント15:22で教えています。「すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、」と書かれています。アダムがそうであったように私たちも同じように死んでいる、死の運命をもつ者として私たちは生まれて来てそのような歩みをしてきたのです。

アダムは何をもたらしたのか? 「罪」をもたらしそれによって私たち人間に「死」をもたらしました。

2. イエス : ひとりの男により死者のよみがえりが来た

21節「死者の復活もひとりの人を通して来たからです。」とあります。キリストの復活によってキリストを信じる者も同様によみがえり、主とともに永遠を過ごすことが保証されたのです。ゆえに、22節「…キリストによってすべての人が生かされるからです。」。ですから、ひとりの人によって死が入ることによってすべての人が死ぬようになり、ひとりの人の死者の復活によりキリストによってすべての人が生かされるようになるのです。ですから、アダムがもたらしたものの、イエスがもたらしたものの、この二つのことをパウロは比較するのです。

「…キリストによってすべての人が生かされるからです。」と、この約束をパウロは与えるのです。21、22節を見るとときにイエスが語られたあることばを思い出します。それはイエスが十字架に架かれた時、一人の犯罪人が罪を悔い改めて救いをいただいたときです。その犯罪人に対して「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」(ルカ23:43)と言われました。イエスはこうしてこの犯罪人にこのすばらしい約束をお与えになったのです。イエスご自身がおられるところに彼自身もそこに招かれるのです。ですから、イエス・キリストによって新しく生まれ変わった者たちは、救いをいただき、そして、主がそうであったように必ず永遠に主とともに生きるのです。

だから、信仰者はすばらしい未来を期待しながら待ち望みながら生きる者たちです。敢えてそのことは皆さんに説明するまでもないでしょう。でも、少なくとも、そのことは私たちの信仰生活に大きな希望をもたらすのです。十字架に架かったあの犯罪人はその瞬間まで永遠の地獄に向かっていたのです。主イエス・キリストを信じる信仰によって彼には約束が与えられたのです。「わたしとともにパラダイスにいます。」と。彼の永遠は一変するのです。希望のなかった私たちは希望をもって生きる者へと生まれ変わるのです。

「イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」(ヨハネ11:25)と。間違いなく、これは皆さんの心に大きな希望をもたらすみことばのひとつ、神の約束だと思えます。私は死んでも生きるのです。あなたも死んでも生きるのです。イエスがともに生きるのです。パラダイスで私たちはイエスとともに永遠を過ごすことが約束されたのです。そのすべての保証になっているのが「イエスの死からの復活」なのです。

ですから、このように言えます。アダムは死ぬ者の先駆者でありイエス・キリストはよみがえり者の先駆者であると。イエス・キリストのよみがえりはこのようなすばらしい希望をもたらしたとパウロは教えます。

C. よみがえりの順序 23、24 a 節

これらのことを教えたパウロは次に「よみがえりの順序」について教えています。23-24 a 節「しかし、おのおのにその順番があります。まず初穂であるキリスト、次にキリストの再臨のときキリストに属している者です。:24 それから終わりが来ます。」と書かれています。どのような順序でよみがえりが起こっていくのか、そのことを教えています。

1. 主イエス・キリスト : まず初穂であるキリスト

主イエス・キリストの復活です。恐らく、紀元30年位と言われていますが、イエス・キリストは確実にその死からよみがえって来られました。

2. 教会時代の信者たち : 次にキリストに属している者

イエス・キリストを信じて救いに与った新約の時代の一人一人のことです。では、その人たちがよみがえるのはいったい何時なのか？空中再臨にそのことが起こります。Iテサロニケ4:14-17に空中再臨、空中携挙と言われる出来事が記されています。「14 私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずで、15 私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」

見ていただきたいのは、空中再臨が起こった時、つまり、イエスが地上ではなく空中に現われたとき、空中に戻って来られたとき、その時に何が起こるのか？15節に「主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。」と、主が再び来られるときもうすでに死んでいる人たちがいます。16節には「主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、」とあります。こういうことです。イエスの空中再臨のとき、もうすでにイエスを信じて死を経験していた者たちが最初によみがえるのです。

そして、「生き残っている私たちが、」と15節にも17節にも書かれています。つまり、イエスが戻られたときに、まだこの地上にあって生きていた人たちはです。その人たちが栄光のからだに変えられて主とお会いするという出来事です。それがこの23節に教えられている2番目に起こることです。

3. 旧約、患難時代の信者たち : 地上再臨

24節に「それから終わりが来ます。」とあります。ある人はこれは「世の終わり」のこと、最後のさばきのときかと思いますが、次のみことばを見るとパウロ自身が「終わり」とは何を指しているのかを教えています。24節の続きに「…そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、国を父なる神にお渡しになります。」と書かれています。この出来事が起こる時がパウロが言う「終わりが来ます」という時なのです。

この「終わり」とはイエスご自身があらゆる支配、権威、権力を滅ぼして国を父なる神にお渡しになる、そのときのことです。その日が来るのです。でも、その日が来るまでにまだいくつかの復活が起こるのです。少し整理しましょう。イエスが復活されました。次に復活するのが「キリストにある信者たち」です。新約の時代に救いに与った者たちがみなよみがえるのです。そして、その後、3番目に起こるのは「旧約の信者、患難時代の信者」がよみがえるときです。その日がやって来るのです。旧約の時代に救いに与っていた人たち、ダビデやモーセなど多くの人たちがいます。彼らがよみがえる時が来るのです。同時に、患難時代、空中再臨の後の7年間に救いに与る者たちのよみがえりの時が来るのです。いったい、それがいつ起こるのか？今度はイエスが地上に帰って来られるとき、地上再臨のときです。

旧約聖書のダニエル書には旧約の聖徒たちのよみがえりのことが教えられています。12:2「地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに。」と書かれています。同時に、患難時代に救われた聖徒たちがよみがえるのもイエスが地上に戻られる時、地上再臨のときです。黙示録20:4「また私は、多くの座を見た。彼らはその上にすわった。そしてさばきを行う権威が彼らに与えられた。また私は、イエスのあかしと神のことばとのゆえに首をはねられた人たちのたましいと、獣やその像を拝まず、その額や手に獣の刻印を押されなかった人たちを見た。彼らは生き返って、キリストとともに、千年の間王となった。」、これは患難時代に殉教していった人たちのことです。

ですから、「よみがえり」ということを見たときに、確かにみことばはこのように、イエスがよみがえり、イエスを信じていた者たちが空中再臨でよみがえり、そして、旧約や患難時代の信者たちはイエスが地上に帰って来た時によみがえると。でも、「よみがえり」についてこれがすべてではないのです。もうひとつ大きなよみがえりが約束されています。

4. 救いを拒んだすべての人たち : 最後のさばき

彼らがよみがえるその日がやって来るということです。黙示録20章に記されている出来事が一般的に「大きな白い御座のさばき」と言われるのは11節にそのように書かれているからです。「また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった。」、これが「さばきの座」です。ここですべての神に逆らい続けて来た人たち、人類の初めから最後に誕生したすべての人たちの中で、主イエスの救い、神のあわれみを拒み続けた人たち、この救いを自らの意

志で拒んだすべての人たちが、その前に立ってその罪をさばかれるのです。

このように書かれています。黙示録 20 : 5 「そのほかの死者は、千年の終わるまでは、生き返らなかった。これが第一の復活である。」、黙示録 20 : 12 - 15 「:12 また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところから従って、自分の行いに応じてさばかれた。:13 海はその中にある死者を出し、死もハデスも、その中にある死者を出した。そして人々はおのこの自分の行いに応じてさばかれた。:14 それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。:15 いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。」と。そこで神はご自分の好みでさばきをするのではなく、それぞれが何をして来たのか？それぞれの犯した罪に基づいて正しい審判を受けるということです。

ですから、このように四つのよみがえりが約束されているのです。このような順序で確かによみがえって来るということが聖書に教えられています。

D. 終わりの日 24b-28節

先ほどから何度も見っていますが、24節に「それから終わりが来ます。」と書かれています。「終わりの日」のことをパウロはこの後教えるのです。「終わりの日」に何が起こるのか？そのことをパウロはここに記します。先ほども読みました。「そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、国を父なる神にお渡しになります。」と。

1. その日の出来事 : 終わりが来たときに起こること 24b節

1) 父なる神に国を渡す

日本語では「父なる神」と訳されていますが、直訳すると「神と父」です。「神と父」は同一だから日本語の聖書では「父なる神」と訳しているのです。その父なる神に主はこの国をお渡しになると言います。多くの皆さんには復習になると思いますが、少し頭の中を整理しましょう。

主イエス・キリストは王国を築かれます。多くのユダヤ人たちがイエスに聞きました。「今こそ我々のために国を再興してくださるのですか。」と。確かに、主は王国を築かれます。つまり、彼ご自身が王であり、すべてを治められるのです。文字通り、そのことが約束されて実際にそのことが起こるのです。そして、先ほどから見ている黙示録にはそのことが書かれています。20 : 4 「また私は、多くの座を見た。彼らはその上にすわった。そしてさばきを行う権威が彼らに与えられた。また私は、イエスのあかしと神のことばとのゆえに首をはねられた人たちのたましいと、獣やその像を拝まず、その額や手に獣の刻印を押されなかった人たちを見た。彼らは生き返って、キリストとともに、千年の間王となった。」、20 : 6 を見ると「この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる。」とあります。

これが何を指しているのかはお分かりですね。千年王国が築かれて、主イエス・キリストが千年の間王として実際にこの地においてすべてのことを治められるのです。この千年間には主に逆らうことがいっさい為されないのです。だからといって、すべての人が救われているということではありません。この千年間には神に逆らうようなことが記されていません。ただ、見ていただきたいのは今見た後の20 : 7 です。千年の間、救いに与った者たちも同じようにイエスとともに王として治めますが、「しかし千年の終わりに、サタンはその牢から解き放され、」とあります。20 : 2 には「彼は、悪魔でありサタンである竜、あの古い蛇を捕らえ、これを千年の間縛って、」と書かれています。7-10節「:7 しかし千年の終わりに、サタンはその牢から解き放され、:8 地の四方にある諸国の民、すなわち、ゴグとマゴグを惑わすために出て行き、戦いのために彼らを召集する。」、千年王国の終わりに、それまで縛られていたサタンが解放されることによって彼は多くの人々を惑わします。「彼らの数は海べの砂のようである。:9 彼らは、地上の広い平地に上って来て、聖徒たちの陣営と愛された都とを取り囲んだ。」と、こうして、彼らはこぞって神に敵対するのです。そのとき「すると、天から火が降って来て、彼らを焼き尽くした。」と、一瞬のうちに神は彼らを滅ぼされるのです。「:10 そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獣も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。」と。このことがあって、神に逆らうすべての敵が完全にさばかれ滅びるのです。

2) すべての敵を滅ぼす 24b節

24節をもう一度見てください。「それから終わりが来ます。そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、国を父なる神にお渡しになります。」と、主が滅ぼされたリストがここに上がっています。すべての敵を滅ぼすのです。「滅ぼす」とは「取り除く、無くする、絶やす」という意味です。存在そのものが除かれてしまうのです。「あらゆる支配と、あらゆる権威、権力」とはすべての敵のことです。神の敵であるすべてのものが滅ぼされるのです。真の支配者であり真の権威者であり、真の権力者はだれか？「神」です。その神に逆らう偽りの支配者、権威者、権力者、つまり、神のすべての敵に対

してこのようなことが為されるのです。

⇒ これは、千年王国の終わりに主イエスが為さること

ですから、この「終わりのとき」とは、このように神に逆らうすべての敵が完全にさばかれるその時のことです。このことが起こるのは千年王国の終わりです。そのときに主イエス・キリストがこのようなみわざを為さる、悪がすべて完璧に除かれるのです。ちょうど、神がすべてを創造され悪が全く存在しなかったときと同じような状態です。そして、その時に主はこの国を父なる神にお渡しになると言うのです。

3) その理由 : それが主のご計画だから 25節

なぜ、神はそのことを為さるのか？25節に「キリストの支配は、すべての敵をその足の下に置くまで、と定められているからです。」とあります。キリストの支配は見て来たように、千年の間イエスはこの地上にあってすべてを治めるのです。でも、この支配は終わる時が来ると言います。それはイエスがすべての敵を完全に滅ぼしたときだと聖書は教えています。注意して見ていただきたいのは「すべての敵をその足の下に置くまで、」という表現です。これは古代の王や皇帝の一般的な慣習から来た表現です。その当時、敵の場合は、王は文字通りしばしば征服した王、または、將軍の首に実際に足を置いて敵の完全な服従を象徴したのです。そのようなことが実際に為されていたのです。

ですから、これまで説明して来たように、すべての敵がこの主によって滅ぼされるのです。その当時の敵がすべて滅ぼされたときに、勝利した王や皇帝がその敵の首に足を置いて「私は勝利した！」としたように、敢えてそのことを使ってパウロが教えようとするのは、完全にこの悪に勝利したということです。その時に主はこの国を父なる神にお渡しになると、25節に「…と定められているからです。」とあります。それが神のご計画でありみこころだからです。

24節で「それから終わりが来ます。」と見ました。「終わり」ということばは「最終的完成、最終的達成」を意味する専門用語としても使われます。つまり、主イエスが来られたその目的が最終的に完成するときのことです。イエスがこの地上に来られた目的はお分かりですね？一つ目は、人としてこの世に来られ私たち人間の罪を取り除くため、私たちを救うためです。そのイエスは天に凱旋されますが、それで終わりではありません。二つ目に、イエスは帰って来られます。最初に空中で、7年後に地上に帰って来られます。そして、イエスは王として治めます。そして、治めた千年の終わりにすべての悪を完全に滅ぼされるのです。こうして主がこの世に遣わされたすべての目的が完成するのです。そのことをパウロは話しているのです。最後にすべての敵が滅ぼされて主は天へ凱旋されるのです。敢えて、この表現をしたのは、勝利をした王が將軍が自分たちの国で勝利のパレードをするかのように…。

イエスは今から約2千年前にこの地上に来られて救いを完成されて天に凱旋されていく、そして、主は再び来られて神の敵を滅ぼすという目的を完全に果たされるのです。こうしてすべての神の計画が成就するのです。そのときに主はこの国を父なる神にお渡しになると、それが「終わりの意味」であると、そのようにパウロは教えるのです。

4) 最後の敵の滅び 26、27a節

終わりの時の私たちにとってすばらしい約束がこのように記されています。26節に「最後の敵である死も滅ぼされます。」と書かれています。、「最後の敵」、それは「死」だと言います。2017年版は「最後の敵として滅ぼされるのは、死です。」と訳しています。この訳は正確だと思います。どういうことか？今見て来たように、千年王国の終わりにサタンが解き放されて多くの人を惑わしていきます。この惑わされる人たちは、千年王国に肉体をもっては行って来た人たちから生まれて来た者たちです。私たちは千年王国に肉体をもっては行っていきません。栄光のからだをいただいて栄光のからだをもってはいるのです。新約の時代の人たちも旧約の時代の信仰者も、そして、患難時代の信仰者も。栄光のからだをもってはいる人たちには、今と同じように家庭をもったり子どもを産んだりということは起こりません。でも、患難時代を生き延びたクリスチャンたちはそのまま肉体をもって千年王国には行っていきます。その人たちは今と同じように家庭をもって彼らから多くの子どもたちが生まれて来ます。サタンが惑わすのはその人たちなのです。千年王国で生まれて、悲しいことに、この救いを受け入れなかった人たちがたくさんいます。その人たちを惑わすのです。栄光のからだをもっては行った人を惑わすことはできません。その人たちにはもう罪がないからです。

そうすると、最後の最後に何が起こるのか？考えてみてください。このときにサタンは千年王国で生まれてまだイエスを信じていない者に働いて神に背かせるのです。そのときに神が彼らをさばかれるのです。そのときに「死」が訪れるのです。それが「最後の死」です。その後、新天新地が約束されていて、もうそこには「死」はないからです。ですから、そのときまで人間は創世記2章で約束されたように死ぬ者として生まれて来ます。でも、最後の敵である「死」が完全に滅びるときが来ると、千年王国の終わりに、主イエス・キリストがさばきを下されるときに、そのときに起こる死が私たち人類の

最後の死だとパウロは教えるのです。それ以降、死は私たちに対して何の効力ももっていないのです。ですから、最後の敵である死もそのときに滅ぼされるのです。

なぜなら、27節「彼は万物をその足の下に従わせた」からです。…と、主がすべてのものに勝利したからだと言います。このように、みことばを通してこれから何が起るのかを見て来ました。すごいことが神によって約束されているのです。今、多くの人を悩ませているのは何か？それは「死」です。皆、死に不安を抱えています。でも、私たちはその死に勝利した者たちです。私たちは肉体的な死を経験してもよみがえってイエスのもとにいき、イエスとともに永遠を過ごすのです。もし、この希望を持っていないで今この地上を生きているならどうでしょう？不安しかありません。もし、病気に感染したらどうしようか？ワクチンの接種もしなかったらこのままで死ぬのではないかと。だから、みな必死になって自分からだを守ろうとするのです。もちろん、私たちも知恵を働かせて無茶なこと無謀なことをするべきでないことは分かっています。でも、少なくとも私たちが言えることは「死は私たちの敵ではない」ということです。死に勝利されたイエスが私たちの神であり私たちの主である以上、私たちも死に勝利したのです。みことばはこうして私たちにはちゃんと教えてくれているのです。

イエスのよみがえりは私たちにこのような希望をくれたのです。この希望をもって私たちは生きることができると。そのすべては、この希望の基になっているのは「イエスのよみがえり」です。

5. 神が誉め称えられる 27b-28節

このメッセージの後、パウロはこのように言います。27b-28節「:27…ところで、万物が従わせられた、と言うとき、万物を従わせたその方がそれに含まれていないことは明らかです。:28 しかし、万物が御子に従うとき、御子自身も、ご自分に万物を従わせた方に従われます。これは、神が、すべてにおいてすべてとなられるためです。」、読んでみると非常に分かりづらいです。ゆっくり見ていきましょう。27節に「万物が従わせられた、と言うとき、」とありますが、だれが言っているのか？「万物」です。「万物が従わせられた、」という動詞は受動態です。自分たちは従わせられたのです。そして、「万物を従わせたその方」、これは「神ご自身」です。「万物を従わせたその方がそれに含まれていないことは明らかです。」とは？ということです。神がイエスにそのすべての支配を託されます。でも、その中に父なる神を支配するということは含まれていない。イエスがすべてを支配される時にそこにはその支配をお与えになった父なる神は含まれていないということです。父なる神がイエスを支配するわけではありません。ひとりの神がどうしてそんなことができますか？

28節には「しかし、万物が御子に従うとき、御子自身も、ご自分に万物を従わせた方に従われます。」とあります。確かにここを読むと、イエスが父なる神に従われると書かれています。では、イエスは父なる神に比べて劣っているから従うのか？NOです。三位一体の神に優位などありません。ひとりの神です。では、どうしてイエスが父なる神に従われるのか？それは、この28節の続きを見ると「これは、神が、すべてにおいてすべてとなられるためです。」と、「これは、」ということばがあります。これは「何かをするために、何かをする目的で」と目的を表すことばです。だから、万物がイエスに従うとき、イエスご自身は、ご自分に万物を従わせた父なる神に御子であるイエスが従う、その目的は「神が、すべてにおいてすべてとなられるためです。」ということです。

これがイエスが自らを父なる神に従わせていく目的だということです。それは何か？「神が、すべてにおいてすべてとなられるためです。」と、パウロはこれとよく似たことをローマ書11:36でこのように言っています。「というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。」、神ご自身のみこころだけが必ず成るということです。すべてのことが神から発して神によって成るのです。そして、神に至ると。神だけがすべての主権者なのです。ここで私たちが見る「神」がどういう方なのか？聖書が教えている神は確かに三位一体の神です。お互いが競い合っているわけではありません。神のみこころに沿ってすべてのことを導かれるのです。ですから、すべてを治める権威をイエスにお与えになった父なる神も、自ら進んで父なる神に従おうとされた主イエスご自身も、それぞれが一致して自身のみこころに沿ってすべてのことを為しておられるのです。

つまり、すべてのみわざを、すべての計画を達成される方、それが神だということです。神がこれらのすべてのことを為さるのです。「すべてにおいてすべて」であると、すべてのことがこの方のみこころに沿って為され、すべてのことがこの方のご計画によって為される。なぜなら、すべてのものを造られ、すべてのものを導いておられるからです。すべてのことを通してご自身のみこころを為されるのです。こうしてパウロは、私たち被造物にとって神がすべてであると言います。

今、私たちの周りで人々がこうべを垂れて崇拝しているものはこのような神ではありません。私たち人間によって造られたものばかりです。でも、みことばが私たちに教えることは、聖書が教えるすべてを造られた唯一真の神はすべてのものを支配しておられ、この方のみこころだけが成るのです。そして、

これからも為されるのです。今、私たちが見て来たのは「これからどうなっていくのか？」ということです。私たちが死んだ後、どのようによみがえっていくのか？よみがえった後何が起こるのか？と。パウロはこれから先のことを話してくれました。その後で、すべては神のものだ、すべてを神が支配しておられると、これが私たちの神であると教えます。私たちはこの方のために生きています。すべての被造物がそうであるように…。

思い出してください。千年王国の終わりに何が起こるのか？すべての敵までもがこの方の前にひれ伏すのです。そして、彼らは永遠の滅びに至る。でも、私たちはどうか？この地上にあって神を喜び、神を愛し神に従う私たちが新天新地にはいるときに、完全に罪から解放されて、この方を私たちは称えながら歩み続けていくのです。私たちがすることは、この神を誉め称え生きる、喜びをもって完全にこの方に従っていきます。今、私たちはそのように生きるのです。私たちにあって神がすべてだからです。「すべてにおいてすべてとなられるお方」、ですから、私たちは神を疑うことをしないのです。神のみことばを疑うのではない。この神を信じこの神を信頼して生きるのです。もっと言えば、この方を心から信頼できることを感謝して、この方のみことばに服従していくのです。この方が神だからです、皆さん！！すべてのことを支配しておられるお方です。

私たちは今日、これから先に起こること、千年以上、神のみわざをこの短い時間に見て来ました。でも、これらを通して私たちに教えられていることは何か？すべてのことは神のみこころのままに為されていくということです。これまでもそうであったように、これからもそうです。「なぜ、あなたがたはわたしの言うことばを信じないのか？」と、コリントの教会はそうだったのです。パウロのメッセージを聞いても、イエスがよみがえったということも聞いても、彼らは信じようとしなかった。パウロが彼らに教えたかったことは、この方は信頼に値する唯一真の神だ、すべてのことはこの方によって為されている、すべてのことは神から発し神によって成り、神に至る、神がすべてにおいてすべてのお方であるということです。

最後に皆さん、感謝だと思いませんか？希望が与えられただけでなく、私たちはこの真の神へと導かれたのです。私たちのこの国は数百万の神々が存在するという、しかも、だれもそのことを疑ったことがない、私たちが親から先祖から教えられたことをそのまま守り通して来たのです。でも、今私たちはこうして神の真理を知り、こんな約束をいただいたことを感謝し、こんなにすばらしい唯一真の神に従うことをよしとしてくださっている、すべて神からの恵みです。「わたしの言うことを信じるのか？」、パウロはコリントの教会にそのことを教えていると、今日のメッセージを見てそのように思います。それは私たちひとり一人にも同じことです。神が言われたことを私は信じるのか？と。

だから、信仰者の皆さん、神のみこころは必ず成されていきます。最善のみこころが成されていくのです。神はそれを通してご自身の栄光を現していかがれます。そのことを知っている者として私たちは「主よ、どうぞ、あなたのみこころが成されますように。」と願います。コロナがどうなるのか私たちには分かりません。神はご存じです。私たちの明日がどうなるの分かりません。でも、神はご存じです。今日、見て来た約束は私たちに与えられたものであり、すべてのことを支配しておられる神がしっかりとあなたを守り続けてくださる。その約束に立って、この新しい一年をしっかりと歩んでいきたいと、そのように思います。よみがえりの主が私たちにくださったすばらしい約束、その約束をしっかりと心に刻んで感謝をもって主に従い続けましょう。